



日々、新聞やニュースで少子化による急速な人口減少による問題が話題になっている。子供のいない私としては肩身の狭い思いである。

人口減少は、非婚化・晩婚化・少子化が三大要素と言われている。が、世界の歴史からみると、興味深い流れがある。

今、通っている大学院の講義で、桜井健吾先生の「近代ドイツの人口と経済(ミネルヴァ書房)がある。『出産』は働いている女性にとってはある意味最大のテーマ

ジーアンドエス社長 萩原 扶未子

マでもあり、これからの時代(老後)を考えると「人口と経済」の講義は、先生の人柄も含め毎回非常に楽しみでもあり学ぶことが多い。

昔は、英国の経済学者マルサスの唱える「マルサスの罠」が繰り返されて、人口に抑制がかかっていた。つまり、環境がよくないと生存資料(食料)の拡大と

世界の歴史に見る少子化

原理に反して、出生率は一九〇〇年ごろから低下していった。この「人口転換」と言われる出生率の低下は、生産と家庭の分離から始まったとされている。つまり、農村や町の手工業では、子供は不可欠な労働力であった。子供が多いことは「子福者」として喜ばれ

で高収入が得られる地位につけるようになった。その事により、社会的地位を継承していくには、子供にお金をかけて教育と熟練を身につけさせないといけないため、子供の数が家庭内で制限されていく。

こうして始まった歴史的な少子化の流れから、現代

中で経費負担から、柔軟に対応できる企業は少ない。また、同僚への仕事のしわ寄せを感じて、いたたまれず、辞めざるえない人も多い。法的に企業負担を今以上求める事は、女性の正社員としての就職率にマイナス影響及ぼす事も、行政府は考慮しなければいけない。

「マルサスの罠」の逆パターンで、人口があるラインまで減れば揺り返しが起こり、新たな要因が発生し、人口が増えるかもしれない。百年後にグラフを見ながら、「急激な産業化と女性の社会進出による、人口減少時代を振り返る」という講義が大学でされているかもしれない。

実質所得の成長で人口が増え、増えすぎると競争勃発や食料不足による体力低下と人口密度が高いために疫病(ペストなど)が蔓延し、人口が減少する流れを繰り返すという。

その中でも注目すべきは、ドイツは高度成長化時代にも関わらず、マルサス

だが、家の生産機能の変化から子供の数は消費の拡大(お金がかかる)となっていた。また、子供は老後の生活保障でもあったが、国の社会保障が確立されていくと共に、この要因もすたれていった。固定されていた身分制階層社会も、産業化により誰でも工夫次第

は女性の急激な社会進出による育児環境変化と、経済成長の鈍化による経済負担が、共稼ぎを促進させ少子化に輪を掛けたと言える。

女性は出産すると、離職は六割にも上り収入低下となる(厚生労働省)。産休保障と言っても、不景気の